

「学びて時にこれを習う、また説(よろこ)ばしからずや」

－「学ぶこと」と「習うこと」の違いを「論語」を通して考え、偏差値5 up を実現しよう－

開倫塾

塾長 林 明夫

Q：「学習」とは何であると、「論語」ではいっていますか。

A：(林明夫：以下省略)孔子のことばを弟子たちが書き残したといわれる「論語」の最初に、「学ぶ」とは何か、「習う」とは何かがあります。まずは「書き下し文」を何回か、大きな声を出して誦(そら)んじて、つまり何も見ないで言えるようになるまでゆっくりと読んでみてください。

「子(し)日(い)わく、学(まな)びて時(とき)に之(こ)れを習(なら)う、亦(ま)た説(よろこ)ばしからずや。朋(とも)有(あ)り遠方(えんぽう)より来(きた)る、亦(ま)た楽(たの)しからずや。人(ひと)知(し)らずして慍(いきどお)らず、亦(ま)た君子(くんし)ならずや。」

Q：どのような意味ですか。

A：須永美知夫先生の「通釈(つうしゃく)」は次の通りです。この「通釈」も、何回か声に出して読んでみましょう。

(通釈)孔子が言った。学問をして、その学んだところを、復習できる機会を逃さずに、何回も何回も、くり返して復習すると、学んだところのものは、自分の真の知識として完全に消化され、体得される。これはまた、なんと喜ばしいことではないか。このようにして、知識が豊かになれば、道を同じくする友達が、遠い所からまでもやって来て、学問について話しあうようになる。これはまた、なんと楽しいことではないか。しかし、いくら勉強しても、この自分を認めてくれない人が世間にはいるもの。そうした人がいたとしても、怨まない。それでこそ、学徳ともにすぐれた君子ではないか。

*以上、須永美知夫著「論語抄」三版、足利市教育委員会(史跡足利学校事務所)平成 15 年 9 月 1 日発行より引用

Q：「論語」の「書き下し文」と「通釈」を何回か音読しました。少し、語句の説明をしてください。

A：(1)「子(し)」は、先生である「孔子」のこと。「日(い)わく」は「～と言った」。「子(し)日(い)わく」は、「孔子が言った」の意。

(2)「学びて」は、「学問をして」の意。開倫塾の塾生の皆さんであれば、「学校や開倫塾で先生の授業を受けて学ぶ」の意味と考えてよいと思われます。「うん、なるほど」と腑(ふ)に落ちる、納得する、よく分かること、つまり「理解」することであると私は考えます。

(3)「時(とき)に之(こ)れを習(なら)う」とは、「その学んだことを復習できる機会を逃さずに、

何回も何回も繰り返し復習する」ことをいいます。皆さんなら、学校や開倫塾で先生の授業を受けて「うん、なるほど」とよく分かったこと、つまり「理解」したことを、何回も何回も繰り返して「復習」すること、つまり「音読練習」、「書き取り練習」、「計算練習」することを意味すると私は考えます。

「繰り返して復習する」、つまり「練習、練習、また練習」の結果、「学んだところのものは自分の真の知識として完全に消化され、体得される」、「定着」が図られます。

(4)「亦(ま)た説(よろこ)ばしからずや」は、「これはまた、なんと喜ばしいことではないか」の意。

Q：開倫塾の「学習の三段階理論」の「理解」→「定着」→「応用」と同じようですね。

A：その通りですね。開倫塾では、「学習」を「理解」、「定着」、「応用」に分けて考えています。「理解」のためには、「おしゃべり」や「遅刻」、「欠席」、「早退」、「忘れ物」などをせずに、学校や開倫塾の先生方の授業を真剣に受けることをお勧めしています。「定着」のためには、まずは「定着のための作業時間を確実にとること」、具体的には①「音読練習」、②「書き取り練習」、③「計算練習」の3つの「練習」を「練習、練習、また練習」の精神で、時間のある限り何回も何回も繰り返すようお勧めしています。

「学ぶこと」と「習うこと」とを明確に分けて、繰り返し「復習」(「練習、練習、また練習」という「定着のための作業」)をすることで始めて、「学んだこと」が「自分の真の知識として完全に消化され、体得される。」

Q：ここまでできてはじめて、「これはまた、なんと喜ばしいことではないか」ということになるのですね。

A：その通りです。

(5)「朋(とも)有(あ)り遠方(えんぼう)より来(きた)る、亦(ま)た楽(たの)しからずや」とは、「このように知識が豊かになれば、道と同じくする友達が遠い所からまでもやって来て、学問について話し合うようになる。これはまた、なんと楽しいことではないか」の意。

「学習」をすることで、「励まし合う仲間」もできるということだと私は考えます。「学校」でも、「開倫塾」でも、「励まし合う仲間」を一人でも多く作ってくださいね。

Q：最後に一言どうぞ。

A：英語でも、「study」は「学ぶ」、「learn」は「習う」とほぼ同じ意味かと考えられます。したがって、西洋でも東洋でも「学ぶこと」と「習うこと(一度学んだことを身に付けること)」とは分けて考えた方が学力は身に付くと考えられていたと、私には思えます。

私は、この区別を明確に認識した上で、開倫塾の全塾生の皆様が自らの力でこの夏休みの間に偏差値5 up を実現されることを希望します。

受験生としての夏休みの過ごし方として、睡眠時間(7~8時間)と生活に必要な時間以外のすべての時間を「学ぶこと」と「習うこと」に使うことで、知識を確実に身に付けてください。

今日ご紹介したのは、「論語」の最初の文章ですが、「論語」には素晴らしい文章がたくさんあります。是非、少しずつでも、一生をかけて読んでください。

また、日本最古の「学校」といわれる「足利学校」では、「論語」をはじめとする孔子の教えを、三千人の僧が勉強したと伝えられています。休みの日に是非一度訪問して、中世の「学に志」した人々がどのように勉強したのかを考えてみましょう。(復元跡が栃木県足利市昌平町にありますよ)

2007年6月11日